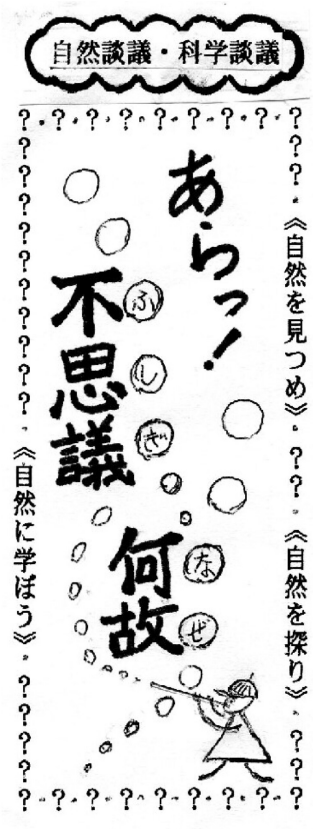

NO．28（通算28）

絵・文・題字
渋谷　一夫

オモトと野鳥

「万年青」と書いてオモトと読む。ユリ科の常緑多年草で、葉は肉厚でつやがあり、年中青々としている。だから、万年青だ。だが、鉢植えの園芸種だと思っていたのに、最近、果樹の木の下でよく見かけるようになった。何故かな。根で殖えるのかな種子が飛ぶのかな。
色々調べてみた。

オモトは、野外ではあまり見かけない。だから葉を観賞する園芸種だと思っていた。調べると昔は強心剤として栽培していたらしい。だが、実生で栽培すると、葉の模様が様々に変わった変わり者が多くできた。そこで観賞用として栽培されるようになったとある。

だが、夏は直射日光を避け、冬は室内に取り込んで栽培するのが常で、管理が大変なのだ。

鉢植えのオモト
（根茎が太く短い）

我が家にも鉢植えのオモトがある。ある時、玄関のドアを開けたら、バタバタッと鳥が飛び立った。カラスだ。何か生ゴミでもあったのかなと調べてみた。赤いオモトの実がなくなっている。これが目当てだったんだと納得した。

野鳥は造園師だ

改めて、屋敷内を調べてみた。あるあるオモトが・・・、ここにもあそこにも。今まであまり気付かなかった。何故増えたのかなと調べてみた。

オモトはユリ科の常緑多年草だ。根茎は太くて短く横に伸びている。この根茎から、つやのある肉厚の葉が10枚位群生している。

真ん中の実がオモトの実
（実は赤い）

どうも30mも50mも先まで、自力で増えていきそうもない。だが、事実増えている。本によると、増え方は、株分けと実生だそうだ。

私は、株分けした覚えはないし、種子のある実を植えた覚えもない。

野鳥の仕業

そこで、現場を調べてみた。実のなる木の周辺が多い。カキ・クリ・モッコク・イヌツゲ・マキ・クロモチなど、実のなる樹木の下が多い。犯人は野鳥のようだ。実が熟する今頃は、必ず野鳥がやってきて、その実をついばむ。その野鳥は他の木に移動し、そこで糞をする。糞の中には、前に食べた木の実の種子が含まれ、そこで芽生える。所謂、実生だ。

実のなる木の下を調べると、オモトだけではなく、ネズミモチやシュロ・イヌツゲなどの実生の幼木も生えている。野鳥は大の造園師・園芸師だったのだ。

カキの木の根元
（実生で殖えたオモト）

ツグミもお手伝い

渡り鳥のツグミは、もう来ているはずだ。遠いシベリヤから日本海を渡って能登半島に来る。

そして、半島を縦断し、内陸に広がって来る。わが家に来るツグミもこのコースを来たのだろう。能登半島のこのコースには、実のなる木がズーッと続いているという。これら、野鳥が造り上げたものらしい。